



一 春はあけぼの（大仏の巻 上）

春はあけぼの。ようよう白くなりゆく山際から街中までが、全てピンク色に染まる中、桜の花びらの数ほどの観光客たちが、街をそぞろ歩く。

ここは京都。まさに、日本の都である。奈良から都が移され、既に、千二百年以上を経ている。そうした歴史の積み重ねの結果、神社仏閣や大学、伝統の老舗などが点在から線在、面在へと、街全体に広がっており、京都駅に着いた瞬間に、文化の香りを嗅ぐことができる。それだからこそ、全国から日本人が、また、世界から外国人が数多く訪れているのだろう。

だが、国の主が京都を去って、東の地に仮住まいを始めため、百年以上も主が不在の状態である。だけど、京都の人々は、以前として、京都は日本の都として、いつ、主が帰京してもいいように、街全体の文化を維持・継続・保持しているのであった。だが、密かに、その地位を奪おうとする者たちがいた。

「わお」「きゃあ」

驚きの叫び声。突然、強風が来襲し、ピンクの花びらが散っていく。羊が毛を刈り取られたように、桜の木が丸裸になってしまった。満開の木から花が飛び散ると枯れて、やせこけたようになり、物寂しく感じる。

そして、この強風は、恐ろしいことに、桜狩りをしていた初老の男性のかつらをも狩り飛ばして、一挙に落ち込む晩秋の気持ちにさせるとともに、若い女性の長い髪を少し早い鯉のぼりのようにたなびかせ、新緑の芽吹きのような、生の発情を感じさせる。その発情を感じさせる声と行動が、今まさに、目の前で起こった。

「きゃあ」

女子高生がスカートを押さえる。元々、膝上の丈の短いスカートが、今、メリーゴーランドのように花開く。当然、中の下着も花柄だ。また、反対に、今どきは珍しいが、地面に擦れるか擦れないかまでの長さのロングスカートの女子高生は、足の中にスカートが入り込み、殿中でござる、殿中でござる、と慌ただしく叫ぶ高級武士のように、足がもつれて倒れた。もちろん、この騒動は、女子高生に特有のものではなく、街行く全ての人々の身に発生した。一体全体、何が起こったのだ。

「おおおっ」

感情がむき出しにされた声。それは、言葉が生み出された有史以前の原始の声なのか。それとも、大きいというのに、苦しみのあまり、「きい」という言葉が続かなかったためだろうか。もちろん、京都を訪れていた外国人も「オー、ノー」と叫ぶ。ただし、その「オー」は大きい「オ」ではない。なぜなら、その後、「ノー」と否定しているからである。

とにかく、そこには、巨大な仏、そう大仏が鎮座していた。子どもはもちろんのこと、大人までが通れるくらいの大きさの鼻の穴から地の底から憎しみのような風が吹いていた。その風と共に、大仏の唸り声が去らずに、直に聞こえてくる。

「都を返せ。都を戻せ」

その声は、まさに、百八つの煩惱がとぐろを巻いたような恐ろしさだった。鐘を一つ突くたびに、おぞましき煩惱の数々が観光客の耳を襲う。

「うわあ」

観光客たちは思わず耳を塞ぐ。その声は、普段、人々が心の奥深くに隠していた自らの煩惱と共振した。そのため、その場に立ってられない。ひざまずき、地面に突っ伏す。まさに、大仏の前に屈服するしかないのだった。辺り一面の地面はピンク色の花びらが人々の血反吐のように敷き詰められ、人々は五体投地するしかない。

引き続き、人々の耳には「都を返せ。都を戻せ」との大仏の唸り声が鳴り響いていた。人々も、その怨念の声につられて「都は返す。都は戻す」と思わず口にしていった。このままでは人々が、この京の都が危ない。その時だ。

「トゥー」という空気を切り裂く雄叫び。そして、「グエツ」という唸り声。巨大な大仏が背中からだるまさんが転んだのように転倒した。だが、一転び二起きの精神で、すぐさま起き上がる大仏。

「誰だ。仏も恐れぬ奴は」

大仏は、鼻の穴を倍ぐらいの大きさに膨らまして、座っていた姿勢からいきり立った。大仏の視線の先には、軽やかに立つ一本の塔が立っていた。

「我こそは、京の文化の守り仏 京都戦隊塔レンジャーの一員の風レンジャーだ」

と言う間もなく、風レンジャーの口から、強風が吹き出された。その風は、辺り一面の散った桜の花びらを巻き起こし、大仏を取り囲んだ。

「やや。前が見えぬ」

大仏は目の前に巻き起こった桜を手で振り払おうとするものの、桜は絶えることなく、大仏の眼に襲い掛かる。

「しゃらくせい」

大仏は腹式呼吸の要領で、少し突き出た腹をより一層膨らますと、鼻の穴から息を一気に吹き出した。鼻風は目の前の桜の花びらを一気に雨散霧消させると、目の前に立つ風レンジャーの姿を現させた。

「なかなか、やるな」

身構える風レンジャー。

「今度はお返しだ」

大仏が強大な手を打ち合わせた。ゴーン。単なる拍手ではない。その音は空間に歪みを与えて、その波動が風レンジャーに襲い掛かった。

「うわっ、からだか、からだか」

風レンジャーの体が歪む。五重の塔の体から瓦が、一枚、また一枚と滑り落ちていく。

「ええい。まだまだだ」

「ゴーン。ゴーン。ゴーン」

大仏が自らの幸せのため、また、他人に不幸を与えるため、手を叩き続ける。その度ごとに、歪んだ空間が風レンジャーの体をきしませてゆく。このままでは危ない。風レンジャーの体がねじれて、塔が破壊寸前だ。

「トウー」「トウー」「トウー」

三つの雄叫びとともに、大仏の体に三つのキックがめり込んだ。

「グエ」「グエ」「グエ」

キックが大仏の体にめり込むたびに、大仏から苦しみのうめき声が三回放たれた。そして、一回ごとに、動かざること山のごとしの大仏が、一歩、また一歩と後ずさりして、最後のキックで、地面に背中からあおむけに倒れた。その振動で、京都にいる街中の人々がトランポリンで跳ねたかのように、数十センチ宙に飛び上がるほどの振動であった。